

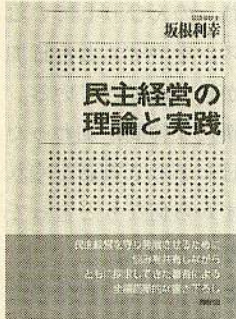
書

評

『民主経営の理論と実践』

坂根 利幸著 同時代社 定価3000円 326頁

中田 宗一郎（日本労働者協同組合連合会）



一言で「非営利・協同の経営を目指す」というのは易しいが、日々実践の場にいる人たちの悩みは大きい。それに応えてくれるかのように待望の書とも

言える『民主経営の理論と実践』（坂根利幸著）が同時代社から発刊された。

著者は公認会計士として、民医連・某病院の倒産に関わったことを契機に以来15年数多くの「民主経営」から、諸問題での相談や解決に携わる中での豊かな体験のうえに、細心の心配りと「あくまで私論」と断りつつも大切な問題提起を「噛んでふくめるように」平易で簡潔にされている。労働者協同組合についても強い関心が払われていて多くの紙面が割かれていることもあり、わがこととして刺激の多い論議に加わることが出来る。

数々の課題提起と理論化の試みは、民主経営の条件とはなにか。「民主」経営における「民」とはいったい誰のことを指すのか。労働者協同組合は「労働と資本の分離」「資本と経営の分離」をあたかも、労働者に取り戻す一つの実験の形態とみえる。民主的運営の基礎としての十分な情報公開。常勤トップの資質。本部集中と分権化。代議制度の質的發展。民主経営と利益。利益の配分の理論。等々、興味尽きないテーマの数々を整理しつつ「私論」を提示してくれている。

私がとりわけ共感した記述に「経営は、規模が大きいほど直ちに衰退しない。顧客がいて、取引先がいて、多数の役職員が生活の糧を得ているか

らである。」(105頁)「民主経営において、経営目的と実質的所有内容と民主的運営のどれか一つでもおろそかにした場合には、その本質的優点は一挙に経営的弱点へと転化して、当該経営は破綻の一途をたどること必定である。民主経営における利益の論議はまさしく民主経営の本質の論議にほかならない。」(118頁)がある。著者が「不思議な経営と不思議な経営集団」(3頁)と呼ぶ「民主経営」への限りない愛着と期待を込めたメッセージなのだとおもう。

本書を、労協役員、事業所長に必読を薦めたい。第5章以下に民主的・科学的管理。人件費。設備投資。資金調達。会計の各章があって実務家にとっては読めばすぐに役立つ多くの示唆を得られる。だからといって、前半を読み飛ばさないでほしい。

実践家は、「実務偏重に陥りやすい」ことの自覚のうえにこの格好の書を読み込み、資本の非人間性を拒み人間らしい労働のための経営の追求に共に学びあおうとの著者の心を知って、そこに「非営利・協同組織」のめざす経営論の真髄をさぐる貴重な整理と何よりも自らの課題を鮮明にすることに役立つことだろう。